

事務局と運営委員で作業を分担、運営委員より各担当を選出して会の事業を進める。

#### <勉強会>

- ・2016年7月23日(土)「オーラルケアにとってのハイリスク～病気・手術・女性ホルモン・ドライマウス～」講師/志村真理子氏
- ・2016年9月10日(土)「母乳と育児と女性の『マインドセット』—授乳服のバイオニアが見た女性の困難さの原因—」講師/光畑由佳氏
- ・2016年11月19日(土)シンポジウム「中高年の性」
- ・2017年1月28日(土)「児童相談所における児童買春、児童ポルノ被害児童への対応状況に関する報告」講師/赤嶺恵理氏、武子愛氏

・2017年3月25日(土)未定

#### <運営委員会>

隔月開催(開催予定日は総会資料を参照)。運営委員以外の会員のオブザーバー参加を歓迎する。

#### <プロジェクト設置>

- ・女性検診改善プロジェクト
- ・「MVAの使用経験」の研究(女性医療ネットワークと共同)
- ・性の自己決定が困難な人たちをサポートする出前講座の実施
- ・すこやか親子21の第2次推進団体など

#### <地方部会>

・近畿支部

- 2017年3月4日(土)講演会「災害と女性、災害時の心身のケア」開催予定。
- ・北海道支部

引き続き「ゆいネット北海道」に協力。

#### 5. 2016年度収支予算

臨時総会での決定により、今年度より個人会員の年会費が6,000円に引き上げられた。法人会員2社の退会があり、新たな法人会員2社以上の獲得を目指す。

#### 6. 規約改正および役員改選

- ・正会員年会費を、今年度より6,000円とする。
- ・運営委員に、新たに林夢都美氏が就任。地方部会世話人に新たに佐保美奈子氏が就任。

総会開催にあたり、会場確保のため宮本法子氏にご尽力いただいた。感謝申し上げる。

※総会資料をご希望の方は、事務局にご連絡ください。

## 「堀口雅子賞」受賞講演会報告

京都橘大学看護学部 工藤里香

性と健康を考える女性専門家の会は全国に多くの会員がいますが、総会、シンポジウム、勉強会などの開催はほとんど東京です。「もっと多くの会員の方の活動を知りたい」という声から、今年度より関東以外でご活躍の会員の方に総会場で普段の活動をご発表いただく「堀口雅子賞」を創設しました。「堀口雅子賞」は、堀口雅子名誉会長より賞金を拠出いただき、会の経費とは別会計で実施していきます。

2016年度の受賞者、井上聡子さん、佐保美奈子さん、安日泰子さんの3名の方の受賞講演を報告させていただきます。

#### ◆井上聡子さん(さとこ女性クリニック・山形)「学校性教育における産婦人科医師の役割—山形県の性教育に関するアンケート調査報告より」

井上さんは、平成16年に「少女か

ら御高齢のご婦人まですべての女性の身近な相談役として、こころとからだのトータルケアをめざします」とのコンセプトを掲げ、さとこ女性クリニックを立ち上げ、診療の傍ら、小学校から大学、保護者や地域での性教育および健康教育のため県内外に出かけている。その活動の場の一つが、2009年に発足した「人間と性」教育研究協議会山形サークルである。今回は2013年度山形県男女共同参画県民企画事業として「人間と性」教育研究協議会山形サークルが実施した「性教育に関するアンケート調査報告書」をもとに発表された。

この調査は、2013年9月～10月に、山形県内の公立小、中、高、特別支援学校の養護教諭を対象に実施されたアンケート調査である。

「学校での性教育に外部講師を活用したいですか?」との問いに、高等学校、

中学校では100%が希望する、特別支援学校では約65%、小学校では約75%が希望している。高等学校では、実際に89%の学校で外部講師を活用している。中学、高校の外部講師依頼理由は①効果的な指導にしたい、が約80%。②教員が指導しにくい内容のため、が約10%であった。性教育で扱う主な内容は、思春期の心身の変化、命の誕生、男女の違いと尊重、命の大切さである。高校生になると、ここに避妊、性感染症、中絶が入ってくるが、身近な存在である学校の教員では確かに扱いにくく、「性教育を依頼したい外部講師の職種」として約80%が挙げている産婦人科医師もしくは看護師・助産師が話すことが望まれている。

その他、外部講師を活用するときの課題として、講師との日程調整、予算、内容の事前検討等が挙げられた。性教育、健康教育は生活の大切な部分を伝える教

育である。この教育をすべての子どもたちが享受できるように、教育政策の充実が必要である。そして学校と外部講師を調整する機関が求められている。

産婦人科医師は、予防教育という観点から学校性教育に積極的に関わり情報を発信して行く必要がある。

#### ◆佐保美奈子さん（大阪府立大学・大阪）「青少年の性とセクシュアリティの支援」

佐保さんは、大阪府立母子保健総合医療センターのオープンから16年間の臨床経験を土台に、現在は大阪府立大学で教育と研究に取り組んでいる。これまでの科研テーマは、①デートバイオレンス予防教育プログラムの開発、②膣拡張術前後のケア、③総排泄腔遺残症患者の課題克服支援である。厚生労働科研では、地域HIV看護の質の向上に取り組んで8年目になる。

大阪府内の高校生への出前講義を年間約10件実施している。その内容は、「おつきあいのマナー」が大きなテーマである。相手の成長・成功を応援するのが愛情であることを伝え、・高校生はNOSEX、・同性愛は異常じゃない、・お別れのルール、・おしゃれ障害予防（毛染め・ピアス・過激なダイエット・マニキュア、カラーコンタクト・金属アレルギー・日焼け）について、丁寧に生徒たちに伝えている。佐保さん本人だけでなく、大学の講座の若い教員、大学生、臨床の看護師・助産師と共に取り組んでおり、多くの後輩を育てている。

また厚生労働科研でHIV看護に取り組んでから、DVD「本気でコンドーム」を作成、HIVサポートリーダー養成研修を年2回実施している。この研修は知識を一方的に受け取るものではなく、「フリスビーで自己紹介」で身体を動かして、「粘土で性を表現」し発信力を高め、「感染拡大シミュレーション」で楽しみながら学ぶ方法を考え、グループワークを中心に進めていくものである。

排泄・性機能障害のある女性の課題克服支援を積極的に行っており、思春

期相談外来（月1回）、女子会（九州、四国、中国、近畿、関東、年2回）と看護を実践している。排泄・性機能障害のある女性は、特に性に関することで様々な課題がある。無理に、早急にはなく、自分を相手にわかってもらうことを大切にしている。「今も、すべてのことを受け入れて乗り越えられたわけじゃないし、将来のことで不安になることもある。そんなときは、いっしょに考えていこうよ」。

「性は心が生きること」、このメッセージを発信しながら、毎日忙しく活動している。

#### ◆安日泰子さん（やすひウイメンズヘルスクリニック・長崎）「隙間を繋ぐ、関係を繋ぐ」（抄録より）

内診台の女性を学生の病院実習で見たこと、これが産婦人科医になる第一歩でした。女性にとって行き着くところとしての産婦人科は、リアルタイムで社会を見ているようなものです。目をそらさないで物事を考えた時、性教育に関わることはごく自然な成り行きでした。

子育て期間中は非常勤開業医であり、請われるままに地域単発性教育の講演を引き受け、一方で1994年からは長崎大学教養科目として性の講義（オムニバス形式）の講師の一員となり、継続的な学生への関わりができるようになりました。

長崎大学の性教育の講座では、ジェンダーという枠組みの再認識とそれをはずして見える世界を知らせようとしてきました。原石のような彼らの言葉に私自身大いに納得、それらを彼らに還していく作業をすると、仮想空間でない現実世界で、彼らは彼ら自身のフィールドワークをしているのだと感じさせられます。

<学生からのレポート>

・この講義を最初とった時には単なる中高の保健体育の延長かと思っていたが、男性の性に対してのリアルな意見、同じ女性のリアルな意見を知ることができて、自分自身も性について真剣に考えることができたし、なによりも今まで持っていた性のイメージが180度が

らっと変わりました。（2011♀）

・性行為は男性が主導権を握るものだという事に深く悩んでいた。自分はまだ性行為をしたことがなく、どうしてもAVなどの情報により性行為は男性がひっぱっていくものだとばかり思っていた。しかしピアメッセージを読み、性行為は男女間で共有していくものだという意見に深く納得し、少し心が安らぎました。（2011♂）

長崎大学講義と一緒に組織したメンバーと共に、看護学生による小学校4～6年生を対象とした「からだ探検隊」という夏休み1日のデイキャンプ、ピアエデュケーションを毎年行っています。月経や射精のことを学び、自分が卵子や精子になるゲームなどを行う、からだを知る性教育です。ここからわかったことは、性を学ぶ環境の大切さ、つまり何を言ってもいい、何を聞いてもいいということ。そしてピアエデュケーションの波及効果は、学生、学内の性に対する文化の醸成につながることでした。これらはその後の自分の性教育への根拠、自信となっていきました。

地域の性教育などの啓発活動にのこの出ると、女性たちから心地よい産婦人科クリニックの要望をさかんに聞かせられ、ならばそれを追求しよう（基本、単純人間）、2003年に開業しました。背景には、日本でのウイメンズヘルスを追求しようとするムーブメントがあります。出産や中絶を扱わないビル開業、コンセプトは「かかりやすさ」です。

地方の良さは、他科の医師とお互いに顔が見える関係が追求できる点です。乳がん検査、ビル普及に伴う血栓症リスク再認識や対応、乳腺外科医・血管外科医との連携、精神科医・内科医・小児科医との連携が、自分の中で整理できたかと思えます。

もっとも重要で難しく感じたのは、精神科医療との連携でした。当院に来院する患者（と言っておきます）には「あらかじめ形成された転移がある」、と事例検討会で精神科医に指摘されました。過剰な期待に翻弄された初期、

支えられたのは長年地域に続いてきたこの事例検討会でした。そこで繰り返し確認を求められるのは「入り口周辺の大切さ」「こちらは何かできるのか」「患者は何をここに期待しているのか」その上で「ここで何かできるのか、できないのか、お互いの確認作業」、すなわち医療者である自分の責任の持

ち方と患者の自覚促しでした。本来的に高次医療機関に求められるようなことは断然ねばならない局面もありました。しかしほとんど多くは細くとも繋がる、その繋がり方を追求してきたつもりです。その繋がりをこちらから絶つことは極力避けてきました。何かあつてその時このクリニックを思い出すか

思い出さないかはここを通り過ぎた女性たち自身（患者）の判断です。このような微妙な立ち位置を含めクリニックを形作った結果（加齢もあるかと思いますが）、ずいぶん楽に気負いなく臨床医として日常を過ごせています。このように事例検討会、他科の医師、そしてスタッフに支えられてきました。

## 総会シンポジウム（2016年6月5日開催） 性の健康の視点で考えるポルノ資源としての女性・主体としての女性

大阪府立大学大学院 武子愛

2016年、今年の総会シンポジウムはポルノ被害と性暴力を考える会（以下PAPSとする）の金尻カズナ氏、映画監督の浜野佐知氏、性教育研究者の村瀬幸夫氏を迎えて、「性の健康の視点で考えるポルノ資源としての女性・主体としての女性」と題し、AVを真正面から扱った。このシンポジウムの企画を立てたきっかけは、AVの制作現場に巻き込まれてしまった人たちの相談支援を行う「ポルノ被害と性暴力を考える会」の宮本節子氏、金尻カズナ氏を講師に迎えて行ったAV出演被害に関する勉強会であった。会では、その勉強会の際にAVに出演している女性たちのなかに自分の意志ではなく巻き込まれている方たちがいるということを知って、衝撃を受けた。と同時に、それとは逆の立場となる自らの意思で出演している女性たちの存在や、AVそれ自体を私たちは社会的にどのように位置付け、どう捉えたら良いのかということをも深めて考える機会がなかったことに気がついたのである。それから約半年、AV強制出演に関する訴訟がニュースになるなど、AV出演被害をめぐる社会状況が変化していくなか、会では各シンポジストとやりとりしながら慎重に準備を進めてきた。その甲斐あってシンポジウムでは有意義な議論が行われた。

まずは金尻氏から、AVの強制出演をめぐる相談件数が右肩上がりに伸びて162件に上ることが報告された。明日からコンビニで自分のグラビアが掲載された雑誌が出てしまう、どうしたら良いですかという相談が来るのだという。「芸能人にならない？」とスカウトマンに声をかけられ、ついに行って話を聞いてみるとAVの仕事を紹介され、一度契約書にサインしてしまうと撮影から逃れられなくなるということであった。さらに出演に至る過程では「バレないよ」とプロダクションから言われていたのに、実際には「身バレ」（＝周囲の人間にAVに出ていることがバレること）してしまうこと、その際にはプロダクションから「もうバレたの、早かったね」と言われ、この道で生きて行く覚悟を決めるよう迫られるということであった。金尻氏はプロダクションが女性たちにこの道で生きて行く覚悟を迫ることについて、「諦めを美化すること」と語っていたのが印象的であった。

次に映画監督の浜野氏から、浜野氏ご自身がAVを撮っていた時代、そして一緒に仕事をしてきた女優たちの姿が語られた。浜野氏は、「マンコ」に化粧をする女優や、仕事ならばすりこぎを突っ込んで「イってみせる」という女優など、男性監督の性幻想にと

られることなく自らの仕事に誇りを持ち、真剣にAVの仕事に取り組む女性たちがいることを語った。また、2000年に浜野氏自身が高齢者の性愛をテーマに撮った一般映画作品である「百合祭」についても触れ、硬くはならない男性性器を前に「やわらかくてあたたかくて気持ちいい」と語る主人公の高齢女性の言葉が紹介された。この言葉は、「硬いチンコなんかいらぬ」という監督からのメッセージだ。そのような高齢女性の性というテーマも、また次回作で取り組むテーマである女性障がい者の性も社会的に「タブー」であることから、それらの「タブー」は「商品化」するから流通して人の目に触れる、人の目に触れることでそれまで考えたことのなかったテーマを社会が考えるきっかけとなる、だから私は「タブー」を「商品化する」のだと、「性の商品化」に絡め「商品化」そのものの持つ意味について語られた。浜野氏が語るその言葉は男の性幻想をあえて壊す、「女性の手で性を取り戻す」作品を撮り続けてきた浜野氏だからこそ言える言葉であり、その力強さに会場は飲み込まれるようだった。

最後に性教育学者の村瀬氏から、性教育の視点、そして若者の性についてのデータから実際にポルノをどう捉えるかということが語られた。日本の性